

要がある。授業でわからない時には「わからない」、「わかるが実感がわからない!」といえる。「もつとわかるような資料が欲しい!」と教師の教科書検討を要請する。また宿題やテストで「習っていないことがでた。この問題はどうなっているのか!」と指摘できる。さらにいえば、計算練習や書き取りを自分たちの学習運動として展開しながら「授業ではもつと大事なことを教えて欲しい!」と要求できる。

私の教え子たちはこの問題を、「学習権」を自覚した学習集団の指導の問題として取り組んでいる。

## 「表紙のことば」

那須高明

わが家の近くの小学校では学級花壇を作っている。広さは3~4m程度の小さな花壇ながらいろいろな花があって楽しい。

新しいクラスが誕生して生徒も教師も期待と不安で胸をふくらませている。新しいクラス作りにやや遅れて学級花壇作りが進行する。学校の花壇は何もプロの園芸家が作るよう見事なものではなくてもよい。多少不様でも、ちょっとみじめな咲きぐあいでもいい。それが子どもたち

具体的にいえば、最初は「落ちこぼしを許さない」班の協力・援助態勢のあり方として、そしてしたいに班から一人ひとりを自立させる主体形成の問題として、取り組んでいる。どんな方法でもいい。教師と子どもが眞の学力を求める共同者となりうるかどうか。そのためには、場合によっては自分の指導に抵抗しうる学習主体を育てているかどうか。このことを、是非とも追求してもらいたいと思う。

(あべ こうさく=新潟大学教育学部)

## 「指導要領」「指導要録」って何だっけ

指導要録は学習内容の基準

【指導要録】は、小学校の状況を記録した書類の原本が『指導要録』です。学校教育法施行規則二条が法的根拠になつ

ていますが、もともとは指導

子どもたちが学習する内容のための原簿という性格でし

た。しかし五五年の改訂で、

外部に対する証明のための原簿の性格が重視されるよう

なり、例えば高校入試の際

もたちの手で育てられていると思うと嬉しくなる。朝の散歩の近所のご夫婦がさりげなく雑草をとっているのをみかけるのも嬉しい。

各学級ではどんな話をして、どんな役割分担をして花壇作りを始めるのだろう。アイディアマンの子、知識・経験の豊富な子、めんどり屋の子、汚れをいやがる子、無口でひっこみ思案の子、千差万別のキャラクターがどの様にからみあって花を育てるのだろう。花を育てるマニュアルはあっても、一人一人の子どもが豊かなネットワークを結んで花を育てるマニュアルはない。それは、それぞれのクラスの生徒と教師の試行錯誤にのみゆだねられているにちがいない。だから、一つ一つの花壇にはそれぞれのクラスのドラマがあるにちがいない。わが家の娘も小学生の頃、夏休みの水やり当番に真剣な責任感を目にみぎらせて、喜々として学校に出かけていった姿が思い出される。自分の出番を待ったのが嬉しかったにちがいない。

花壇にどれだけ花を咲かせるかということと同時に、クラスの一人一人の子どもの心にどのような花を咲かせることができるかというテーマがここにある。今年も学級花壇にエールをおくりつけようと思う。

(なす こうめい=長岡大手高等学校)

が自分で研究するための手引書であるとされ「試案」の文字が付されました。指導要領はその後何回か改訂されました。一九五八年の改訂以降文部省はこれを官報で告示し、学校の教育課程を法的に拘束できると主張するようになり、最近では、特に「日の丸・君が代」の強制に関連して「教師が(文部省)指導に反した場合処分もありうる」(八九・ニ=西岡武夫・文相)との姿勢を顯示しています。戦後六度目の改訂でいわゆる「新指導要領」が告示(八九・三)され、小学校は九二年度、中学校九三年度、高校九四年度と逐次全面実施されることになっていましたが、多くの問題点を抱えており、「白紙撤回」を求める声もあちこちであがっています。

の調査書(内申書)の原本にもあります。記載事項や様式に変更がなされ、市町村教育委員会が定めることになつてはいますが、実情は文部省が通知した基準に従つています。ところで、文部省は法令上の規定がなく、市町村教育委員会が定めることになつてはいますが、実情は文部省が改訂することになりました。新しい様式では、小学校低学年では三段階にはするものの廃止はせず、中学校では結果、悪名高い五段階相対評価式を改訂することになりました。このほど、一年ぶりに様式を改訂することになりました。新しい様式では、小学校低学年での相対評価を廃止するなど見直しもしていますが、高学年では三段階にはするものの廃止はせず、中学校では結果、悪名高い五段階相対評価式をそのまま残しています。また「観点別学習実況」は絶対評価によるとしていますが、その観点は「学習指導要領が目指す学力」と強調するなど、「新指導要領」の押しつけがここまで行われています。

(片岡 弘)